

秋建時報

秋建時報

平成22年11月1日(第1199号)



発行／(社)秋田県建設業協会
秋田市山王四丁目3番10号
TEL 018(823)5495
FAX 018(865)2306

<http://www.a-kenkyo.or.jp>



雪国に住む者にしか想像できない寒冷なこの季節、ひと枝に凜として止まる野鳥の姿にはいじらしさと、孤高な美しさを感じる。

「凜」 絵／文…白澤恵舟

ブロック会議

会長 菅原 三朗

恒例の平成22年度東北建設業協会ブロック会議が、10月22日山形市のホテルメトロポリタン山形で開催された。

私は冒頭、「業界を取り巻く環境は政権交代後、国の公共事業予算はかつてない大幅な削減が断行され、一層厳しさを増し地域間格差の拡大、労務費の下落、競争の激化による利益率の低下など、かつてない厳しい危機的な経営環境に直面しており、今後工事の発注が3割以上減少すると予想され、これ迄地域の安全・安心を守ってきた会員企業の倒産の顕在化が危惧される所である。このような厳しい環境の中でも、地域建設業は緊急時も含めて安全・安心を守る危機管理産業であり、地域経済を支え雇用の創出と納税義務を果たし、経営者は歯を食いしばり眠れない日々を送っているのが現状である。しかるに民主党政権下の国土交通大臣は、公共事業予算をばっさり切り業者数が多いから大手は海外へ地元は農業・林業へと簡単に言うが、国土交通行政は発注業務と同時に建設産業育成の両輪が

責務であるはずだが、その建設産業育成という大事な責務を放棄しているのではないか。真面目に公益事業に参画し技術と経営に優れた企業が退場を余儀なくされた場合、国土の保全は誰が責任を取るのか。全産業の中で地域に根ざした建設業の位置づけを再確認し、産業の育成をしっかりと国民の前に示していただきたい」と訴えた。

議事は開催地山形県が議長となり、提案議題は①日本経済の発展と安全・安心な国土保全のための公共投資予算の確保 ②入札・契約制度の適正化の推進 ③建設従事者の労働賃金の確保対策 ④総合評価方式での会員企業の適正な評価 ⑤災害時における建設業の災害対応施策 ⑥業種転換における助成制度の確立⑦中小建設企業の資金調達の円滑化等の7項目であり、夫々各県が分担して提案理由の説明を行った。

私は予算関係について提案の説明を行い、社会資本の整備は国民生活、経済活動に不可欠な基盤施設であり、まさに社会保障の一つである。しかるに22年度国の公共事業費は前年度比18.3%減、東北では22.4%以上の減となっており、全く異

常事態である。この急激な削減で日本は何を得たのか、雇用が生まれたのか、景気が回復したのか。そして失ったもの、いやこれから大きく失うもの、それはまさしく地域に根ざし公益事業に参画している優良企業ではないのか。何より減らすだけの政策ではなく将来を見据えた今後の、社会資本整備重点計画のグランドデザインを示していただきたい。そしてデフレ脱却のため内需拡大が必要であり、補正予算の早期成立と前倒し執行が不可欠である。食の安全やエネルギー問題で日本の国益、自立的発展や国際競争における国家戦略を考えた場合、東北の社会資本整備促進こそがキーワードである。公共投資の東北への重点配分を是非お願いしたいと説明した。

今回は連合会がブロック会議、議題の提案内容を簡潔で実に要領よく分かりやすくまとめた「概要版」を作成配布したことにより、提案理由の理解に大いに役立った。

夫々の提案議題については国交省本省、東北地方整備局、各県土木部等により御回答をいただき、有意義に盛会裡に終了した。

国土の保全是誰が

東北建設業協会ブロック会議

東北建設業協会連合会(菅原三朗会長)は10月22日、ホテルメトロポリタン山形において、東北建設業協会ブロック会議を開催し、今般の諸問題について意見を交わした。

会議冒頭の挨拶において菅原連合会長は、「昨年の政権交代後、国の公共事業予算の急激かつ大幅な削減により建設業界を取巻く環境は一層厳しさを増しているが、地域建設業は緊急時も含め地域の安全・安心を守る危機管理産業であり、地域経済を支え、雇用の創出と納税義務を使命としており、経営者は歯を食いしばり眠れない日々を送っている。」と危機的状況を訴え

「真面目に公益事業に参画し、技術と経営に優れた企業が退場を余儀なくされた場合、国土の保全是誰が責任を取るのか」と問題提起した。

会議には、吉村山形県知事、佐貝山形県議会議長、国土交通省から下保大臣官房技術審議官、青山東北地方整備局長、浅沼全建会長が出席。挨拶のあと議事に入り、東北地方の中小建設企業が抱える喫緊の課題、7項目について説明・要望を行った。

この中、菅原連合会長は「日本経済の発展と安全・安心な国土保全のための公共投資予算確保について」、本会の北林副会長は「入札・契約制度の推進について」をそれぞれ説明した。

会議の最後、次回東北ブロック会議を秋田で開催することを決定した。



建産連

県と口蹄疫等対策協定を締結

高病原性感染症発生時の迅速な対応・協力体制構築



10月5日、秋田県と秋田県建設産業団体連合会(菅原三朗会長・以下、建産連)は「重大な動物感染症発生時における防疫対策業務の応援活動に関する協定」を締結した。

同協定は今年、宮崎県で発生した口蹄疫をはじめ、高病原性鳥インフルエンザ等の重大な動物感染症が秋田県内で発生した際に、家畜の殺処分・埋却処理などを迅速に行う体制を構築することを目的としたもので、病疫発生時に秋田県が防疫業務実施を必要とした際、県から建産連が要請を受け、重機・資材等の調達、埋却溝の造成等諸業務を行うもの。

締結式は同日、秋田県庁で行われ双方が協定書を取り交わしたあと、堀井副知事は口蹄疫について触れ、予防対策は当

然として発生時の初動が重要であり、速やかに殺処分・埋却を行うことが被害を最小限に食い止めるとし、宮崎県での発生時において地元建設産業が果たした役割に触れ、「今回の協定を締結することにより、よもやの事態が秋田県で発生した際に速やかにご協力をいただけるということは大変心強い」と述べた。

また、菅原会長は地場建設産業が地域に密着し、県民の安全・安心に重要な役割を果たしてきたとし、「協定締結を契機に各業者との協力体制・連携を密にして、いつ、いかなる場合でも要請された際には防疫対策業務に速やかに対応、総力を挙げて貢献して参りたい」と挨拶した。

建災防

全国建設業労働災害防止大会

「見えないリスクをみつけだし みんなで実現職場の安全」

建設業労働災害防止協会(銭高一善会長)の主催で、第47回全国建設業労働災害防止大会が、仙台市体育館(10月21日)・仙台国際センター(10月22日)で開催され、全国から関係者約5,600人が参加した。

開会に当たり、銭高会長が挨拶。また、今回は宮城県での開催であることから大会実行委員長の佐藤博俊建災防宮城県支部長より歓迎の挨拶があった。

大会初日の21日は安全衛生表彰が行われ全国で安全衛生活動等に貢献された事業場と個人が表彰された。その中で建災防秋田県支部から優良賞代表として(株)村岡組(村岡吉朗社長・平鹿分会)が壇上で表彰された。

また、東北大学加齢医学研究所教授の川島隆太氏による「脳を鍛える」と題した記念講演が行われ、翌日は会場を移し、コスモス、土木建築施工、安全衛生教育、住宅の4専門部会が開催され、それぞれの

テーマに沿って企業による安全衛生活動等事例発表が行われた。

◎建災防秋田県支部関係者の受賞者は次のとおり。
・秋田県支部表彰者

(功績賞・3名)

伊藤久一 中央土建株式会社
村岡淑郎 村岡建設工業株式会社
福岡政弘 秋田ポーリング株式会社

(功績賞・2名)

安井導憲 有限会社 北陽建設
大川 隆 花岡土建株式会社

(優良賞・5社)

有限会社 黒沢建設株式会社 太平建設
木村建設株式会社
株式会社 村岡組
有限会社 小原建設



平成22年度 秋田産業安全衛生大会開催

秋田県労働災害防止団体連絡協議会（三浦政彦会長）が主催する「秋田産業安全衛生大会」が10月6日、秋田市文化会館で開催され関係者ら約350人が参加した。

はじめに三浦会長が挨拶。「近年の災害の背景には生産工程の多様複雑化や危険・有害要因の多様化、経費削減等による人材、教育の不足、労働者高齢化、非正規労働者の増加などが考えられるが、いかなる状況であっても働く者の安全と健康の確保は事業を進める上で最優先されなければならない」と安全衛生意識の高揚を参加者に訴えた。

続いて行われた表彰式では、事業場の安全衛生活動の推進や取組みが優秀であった26事業所と25個人が表彰がされた。その後、秋田県出身、スポーツコンサルタント・元水泳平泳ぎ五輪代表で秋田県立総合プール名誉館長でもある長崎宏子氏による「笑顔で生きるために ～泳いだ先にあるもの～」と題した記念講演が行われた。

また、午前の部では同会館5階で「秋田快適職場推進大会」が開かれ、快適職場づくりの事例発表と北秋田市民病院保健福祉活動室ヘルスケア・トレーナー近藤忠孝氏による「定期検診における有所見率の改善について」～労使が協力し合っ、有所見率の改善に取組みましょう～と題した講演も行われた。



◎建災防関係での表彰者は次のとおり。

◆事業場賞(8事業場)

- (株)新東組 藤和建設(株) 秀栄建設(株) (株)足利工務店
- (株)三義 (株)森元組 (有)泉谷土木 (株)山脇組

◆個人賞(8名)

【功労賞】 2名

- 伊藤与四郎 (有)伊藤組 佐々木一勉 (株)佐々木組

【職長賞】 2名

- 小館 誠 (株)柳沢建設 佐々木清栄 (株)菅与組

【功績賞】 4名

- 松岡 晴樹 (株)松岡組 橋本 一康 菊地建設(株)
- 小原 良英 大曲土建(株) 斉藤 剛 (株)東翔

(財)建設業福祉共済団から

建退共秋田県支部から

※上記の記事はホームページに掲載されています。

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

秋田水風景

文と写真/加藤隆悦

フリーカメラマン兼フリーライター
取材・執筆歴/旅の手帖、WoodyLife、ペンチャー・リンク、郷、ある他
海外取材歴/ドイツ、アメリカ、ブラジル
写真塾・写案 主宰/写真教室、撮影ツアー企画等

Vol.18

秋田内陸線 小又川鉄橋

【あきたないりくせんこまたがわてつきょう】
北秋田市阿仁前田



秋田内陸縦貫鉄道の阿仁前田駅を発車した下り角館方面行き列車は、すぐに緩い弧を描く長い鉄橋を渡る。

下を流れるのは、森吉山北麓に降る雨や雪を一手に引き受ける小又川。下流川から鉄橋方向にカメラを向けると、晴れた日には正面奥に森吉山の山頂も一望でき、変化に富んだ風景の中を走るローカル線として鉄道ファンに人気の内陸線沿線でも、とりわけ人気の高い撮影スポットの一つになっている。

一見すれば、平和でのどかな、好ましい田舎の風景であるけれども、しかし自然のいたずらは恐ろしいもので、平成19年の9月には、大雨でこの川が氾濫し、阿仁前田地区の多くの家屋が一階部分が水没するほどの大洪水に見舞われた。周辺地区の中でも特に阿仁前田地区は、南から流れてきた阿仁川と小又川の合流地点にあるため、ことさら被害は甚大であったようだ。地区内で商売をしていた

人たちの中には、洪水被害の復旧の負担があまりに大きすぎて、商売の再開を断念したところもあったという。

現在建設中の森吉山ダムがもしこの時点で完成していたら、被害は最小限に食い止められた可能性もあり、わずか数年、時間差が、悔やんでも悔やみきれないものになってしまった。願わくば、災禍に遭われた阿仁前田の皆さん（及び周辺地区の皆さん）の心労が一日も早く癒えて、元の、人と自然が寄り添った平和で穏やかな日々を取り戻していただきたいものである。

小又川の上流域には、桃洞渓谷や小又峡など、秋田が誇るべき優れた自然探訪スポットがある。秋田からも都会からも、それらの渓谷美を堪能すべく多くの人々が森吉山麓には訪れる。その森吉山麓の水環境と人とは、やはり、友好的な関係であることが、望ましいのだ。

戦争を知らない “成人”たちよ

菅 禮子

つれづれなるままに一などと書き出すと、六～七百年も前の有名な随筆家、吉田兼好もどきになるが、某月某日、レコード店廃業の折、しまいこんでいた売れ残りの商品の中から“悲しき口笛”というタイトルのDVDをなにげなく封を切って鑑賞した。そしてうなってしまった。

主演は美空ひばり。

知人の中で「わたしね、なぜか“石原裕次郎”という俳優が嫌いなの」といった人がいたがそれに倣^{なら}って言うと、わたしの場合“美空ひばり”に対して、嫌いというよりは舞台の上から、驕慢ともとれる笑顔でウインクしてみせたりする態度に侮蔑に近い反感を抱いていたのだけれど、“悲しき口笛”以来、その認識を改めざるを得なかった。

時は戦後間もなく…所は港“横浜”第二次世界大戦中、敵の大空襲によって両親を喪い、たった一人の兄は戦場に赴いて、生死も定かでない。廃虚の土管の中をねぐらにして孤独なその日暮らしの戦火浮浪孤児というのが、ひばりの役である。年端もいかないひばりの熱演というか、役柄への打ちこみようが、歌の巧さと共に単なる芸達者なこましゃくれた子役とは言い難い天稟をうかがわせる。

しかも、この映画を成功させているのは、監督と脇役陣である。津島恵子、大坂志郎、菅井一郎、徳大寺伸、原保美。

多方は既に鬼籍に入った人びとと思うが、画面は家城巳代治監督の伎倆によって、楽しく手堅く、倦きさせず演出され、紆余曲折の末、兄にめぐりあう物語が展開する。

ひばりが歌う。“悲しき口笛”は藤浦洸の作詞、万城目正作曲。あいまに天才ヴァイオリニストと謳われたヴァイオリニスト役の徳大寺伸の弾くクラシックの曲が演奏されて単なる娯楽映画でない質の高さをはさんで画面をひきしめている。

なによりも筆者が心を惹きつけられたのは、敗戦後、荒廃した焼跡の画面に漲り溢れる活気と明るさである。

みんな貧しかった。みんな飢えていた。

みな着たきりスズメでボロをまとって夜は地べたに着のみ着のまま寝ていた。

それなのに伝わってくる風景や人びとのかもし出す明るい活気はなんだろう。

そこには蘇った平和への喜びと、未来に対する希望がみち溢れているのだ。

それに比べて現代のドラマの現場はどうか？溢れる物資、駆使されるIT、あの焼け跡からは想像もつかないような豊かな物質文化の中で、揃いも揃ってつややかな長い黒髪、つるつるに磨かれたしみ一つない肌の女性たちが入れ替わり立ち替わり登場して来てどれも無個性、同じように見える。そんな時、津島恵子のあのたしかな演技に支えられた爽やかで清楚な姿が眼前に浮かぶのだ。

しかも展開する筋書きは、人の表情の動きもはつきりしないような真っ暗な画面(どうしてああ暗いんだろう?)、斬った!刺した!毒を盛った!車で轢き殺した!転がる死体!人の体をつらぬく刃物の光!しかもこれらは実際に私たちの眼前で展開している—いったいこれは何なのだ?物は豊かで化学・科学の分野は目ざましい進化を遂げているというのに、なぜこう世相は暗いのか?考えてみると今、国会でしたり顔にわめいている議員達も、すでに戦争を知らない世代に属する人びとが、かなりの比率を占めている。教科書や物語で知識では知っていても実体験では知らない。強制的に言動を一律化され、表現の自由を束縛され、国政の在り方に批判的な言動をしたというので、牢に入れられて拷問を受け、命を喪った人さえいたという…そしてまた、敵の空襲で無数に降ってくるエンピツほどの焼夷弾で家が丸焼けになり、爆弾で、五体がバラバラになるという現実の恐ろしさ!をドラマの作り手たちも肌身では知らない。^戦争を知らない子供達よ—という歌があったが、今は戦争を知らない成人達よ(外交による戦争の仕方も知らない)の時代なのだ。広大な宇宙の中では星屑の一つかも知れないけれど、この青く美しい私たちの棲む地球を、人間の総白痴の星にしてはならないと思う。

暗く陰惨なお手軽で深みのないドラマの作り手達に”悲しき口笛”を見直して、真の意味での人間ドラマ、明るく、逞しく、濃やかさを映像文化に現出させてほしいと希う。